

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0992500058		
法人名	医療法人社団 湘風会		
事業所名	グループホーム アベータ		
所在地	栃木県那須郡那珂川町馬頭2050-1		
自己評価作成日	平成26年1月11日	評価結果市町村受理日	平成26年6月17日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.jp/09/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人アスク		
所在地	栃木県那須塩原市松浦町118-189		
訪問調査日	平成26年1月21日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

理念にある通り、「ゆっくり」「いっしょに」「楽しみながら」一人一人のその人らしさを大切にした生活支援に努めております。入居者に寄り添いながら、家庭的な雰囲気与生活できるように心掛けております。家事ができる方には、声をかけて職員と一緒に家事を行っていただいております。また、毎日入居者みんながリビングなどで会話やレクリエーションをしながら楽しむ時間をつくっております。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

本事業所の建物は全体的に南向きで中庭があり、陽光が十分射して屋内も明るい。比較的長く勤務している職員が多いことから職員間の連携もスムーズで、職員は入居者が動こうとする際に素早くそっと寄り添ったり、明るく声かけをして雰囲気を盛り上げるなど、事業所の理念に沿った充実したケアが展開されていることが窺える。運営推進会議に入居者が交代で参加して意見を必ず述べてもらったり、聴覚障がいのある方には絵が描かれたカードを利用して意思疎通を図ったり、家事を手伝う入居者用にタイムカードを作り使ってもらったりするなど、入居者一人ひとりが楽しく快適に過ごせるよう職員が創意工夫をしている。重度化や終末期の対応については、入居者や家族の意向を汲み取り、できるだけ事業所での生活が継続できるよう取り組みを進めている。今後も、入居者や家族の意向を尊重したケアの展開を継続していくことを期待したい。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目№.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項 目		取 り 組 み の 成 果 ↓ 該当するものに○印		項 目		取 り 組 み の 成 果 ↓ 該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と
			2. 利用者の2/3くらいが				2. 家族の2/3くらいと
			3. 利用者の1/3くらいが				3. 家族の1/3くらいと
			4. ほとんど掴んでいない				4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように
			2. 数日に1回程度ある				2. 数日に1回程度
			3. たまにある				3. たまに
			4. ほとんどない				4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている
			2. 利用者の2/3くらいが				2. 少しずつ増えている
			3. 利用者の1/3くらいが				3. あまり増えていない
			4. ほとんどいない				4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が	66	職員は、活き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が
			2. 利用者の2/3くらいが				2. 職員の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが				3. 職員の1/3くらいが
			4. ほとんどいない				4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が
			2. 利用者の2/3くらいが				2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが				3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない				4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が
			2. 利用者の2/3くらいが				2. 家族等の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが				3. 家族等の1/3くらいが
			4. ほとんどいない				4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が				
			2. 利用者の2/3くらいが				
			3. 利用者の1/3くらいが				
			4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価		
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
Ⅰ.理念に基づく運営						
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	施設内に掲示してある理念を職員は確認して、「ゆっくり」「いっしょに」「楽しみながら」一人一人がその人らしく生活できるように、支援している。	「ゆっくり」「いっしょに」「楽しみながら」という理念について、日常的に十分実践できているか、職員は月1回の定例会議や朝夕の申送りの際に確認している。食事の際その方に応じてゆっくり食べてもらう姿や、食器洗いを職員と入居者が一緒に楽しそうにやっている様子などからも、理念に沿ったケアが行われていることが窺える。		
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	数日おきに食料品・日用品は地元の商店やスーパーなどに買い物に行ったり配達してもらったりしている。毎月の散髪は地元の理容師に来てもらっている。また、定期的な外出では地元の自然観察や美術館見学を行っている。	近隣のスーパーに時々職員が買い物に行くが、その際に入居者も同行しておやつ類を買い、従業員に声をかけてもらうこともある。また、事業所主催のお祭りに住民の参加を促したり、地域のどんど焼きに入居者も行き、住民と話したり模擬店の食べ物を一緒に食べたりするなど、地域との関わりが深まるよう取り組みを行っている。		
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	前回の認知症サポーター研修を行ってから時間がたっているので、再発信したいと考えている。			
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	入居者から、日々の暮らしや行事に対する感想を述べてもらい、その後の支援の改善に活かしている。	運営推進会議は、併設の小規模多機能事業所と共催で年6回開催され、町担当職員・地域包括支援センター職員・民生委員・家族・入居者・小規模多機能事業所の利用者が出席している。事業所の運営状況の伝達や情報交換の他、参加者からの意見や提案等が活発に出され、行事内容の充実やボランティアの開拓等運営に反映されている事例も多い。	前回指摘された会議議事録の不備は解消されて充実した記載内容となっており、職員への周知も行われている。入居者・利用者は会議毎に交代で参加して、必ず意見や要望を言ってもらっている。今後もこうした入居者等の意見を大切にする姿勢を継続していくことを期待したい。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	認定調査の時にはケアマネや介護職員から入居者の状態をわかりやすく報告している。また事故発生時には役場に報告して、後で現場の確認と指導のために来てもらった。	町担当職員は、運営推進会議だけでなく事業所の行事等にも積極的に参加してくれている。昨年起きた入居者の事故の際も、報告を受けてすぐ事業所に来て状況確認を行い、その後の対応についても随時指示や指導、助言をしてくれるなど、相互の連携が図られている。	事業所は、町からの「要介護者の二次避難所」指定の依頼を受け、快く応じてその具体的対応について検討しているところである。今後も相互の協力関係を維持し、事業所として地域貢献をしていくことを期待したい。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	日中のドアの施錠はなるべく行わず入居者がドアから出て行く時は職員が必ず付き添うようにしている。また、入居者に職員が声をかける時は強い口調は避けて必要以上に入居者の行動を抑制しないように配慮している。	拘束禁止についてのマニュアルは作成済みで、職員にも周知している。職員は、入居者への声かけの際も耳元で話しかけたり、抑止的な言葉を使わないよう心掛けている。入浴介助等で職員の見守りが十分できない状況の時に、一時的に玄関に続く仕切りドアに施錠することがある。	事業所は、「一時的な施錠であっても適切ではないので、極力短時間になるよう心掛けている」とのことであるが、常に無施錠のままケアに臨む体制作りに向けて早急に取り組むことが望まれる。	

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	すでに高齢者虐待防止関連法については学習している。職員は常に入居者に身体的・精神的な苦痛を与えぬように注意している。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	すでに権利擁護に関する制度については学習している。また、地域包括支援センターや後見人と成年後見制度の必要性について検討している。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約書等の文書を用意して、その内容を管理者が家族・本人に丁寧に説明している。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	家族が面会に来た時や運営推進会議の時に、管理者・ケアマネが要望を確認している。	できるだけ職員のほうから声かけをして、入居者からの希望や要望を汲み取るよう心掛けている。ほとんどの家族が毎月面会に来るので、その際に意見等を聞き取っている。家族からの意見を取り入れ、入居者の脱水防止を徹底するため、毎日の水分摂取量を記録に残して確認するよう改善した例がある。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	職員からの運営に関する意見は、定例会議の時以外にも随時受け付けている。	定例会議では、職員から活発に意見や提案が出されていて、毎回きちんとまとめられている議事録からも職員の意欲的な姿勢が窺える。事業所の活性化をどう図るかということをテーマにした際は、様々なアイデアが出され、ボランティアによる入居者へのマッサージや化粧の場を設けることがなどが実現している。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	代表者は職員と面談を行い、職員個々の要望を確認して、職員各自がやりがいを持って働けるようにできるかぎり要望に応えるように努めている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	管理者・ケアマネは定期的に地域ネットワーク会議やケアマネ連絡会議等で毎回テーマを決めて勉強している。また、他の職員は定期的に事業所内研修に参加している。		

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	毎月法人内で施設交流会を行い、他の施設を見学したり意見を交換したりしている。また、全施設合同で研修を行ったりしている。		
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居前から本人と会って会話しながら馴染みの関係をつくり、不安や要望を確認してゆくようにしている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居前から家族と会って会話しながら馴染みの関係をつくり、不安や要望を確認してゆくようにしている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人・家族の不安や要望を聴いて、必要としている支援を見極めるようにしている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	掃除や洗い物などで入居者ができる仕事は、職員と一緒に本人のペースを大事にしながら、行うようにしている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	電話や面会時の会話によって、家族と情報を共有するように努めている。病院受診や必要品の調達も家族に過度の負担がかからない範囲で、行ってもらっている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	家族には過度に負担がかからない範囲で自宅等への外出・外泊を勧めている。家族・親戚・友人などが面会に来た時は、ゆっくり落ち着いて話ができるように配慮している。	正月やお盆の時には家族に呼びかけをして、可能な場合は入居者が外出や外泊をして家族と触れ合ってもらおうようにしている。併設の事業所からこちらに入居した方のところに、一緒に利用していた方が訪ねてきて談笑することもあり、職員は一緒にゆっくり過ごしてもらえよう配慮している。	

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	会話しやすい入居者同士を近くに座らせたり、難聴で会話が難しい入居者には、職員が話し相手になったりしている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	契約終了後も本人・家族から相談があれば、受ける予定である。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日常会話から入居者の希望や意向を確認している。本人が希望を表現できない時は家族に希望を確認したり本人本位に検討している。	自分から意向等を述べる入居者は少ないため、職員は日常的な関わりの際にできるだけ声かけをして、意向や思いを汲み取るようにしている。聴覚障害のある方については、家族にも協力を得て色々なパターンの絵を描いたカードを作り、それを随時示してもらって、言おうとしていることを把握する工夫を行っている。	食器洗いや掃除等を手伝ってくれる利用者の思いを察して、職員と同じようなタイムカードを作って使ってもらおう等、利用者の意向を尊重する職員の姿勢を今後も持ち続けていくことを期待したい。
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居前から本人・家族や前担当ケアマネから、生活歴などを確認している。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	一緒に生活している職員が入居者の暮らしぶりを観察して、その情報を記録して職員間で情報を共有している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人・家族の要望をもとにして、管理者・ケアマネ・介護職員が目標・サービス内容を検討している。	家族からは面会時等に要望等を聞き取り、入居者には直接声かけをして望んでいること等を把握している。計画作成担当を兼務している管理者は、定例会議でのカンファレンス内容やモニタリングの結果等をもとに介護計画の原案を作成し、サービス担当者会議で検討して、最終的な介護計画としている。入居者の状態や家族等の状況に大きな変化があった場合は、適切な内容になるよう随時介護計画の変更を行っている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	入居者の様子やケア内容・その結果などは、その日のうちに個別記録に記入して、職員はその記録を随時確認している。		

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	毎月、人形劇・紙芝居をしてくれる人を施設に招いており、昨年からマッサージと化粧をしてくれる人を施設に招いており、入居者に好評である。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	ときどき職員が付き添って、近くのスーパーなどに買い物に行っている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	かかりつけ医の受診は家族と職員とで、手分けして行っている。	基本的にはかかりつけ医の受診は家族が付き添っているが、家族ができない時は管理者や併設事業所の看護師が対応している。受診結果(状態、服薬)は看護師が家族から報告を受けるが、いない場合は職員が聞き日誌に記入したり口頭で看護師に伝えている。緊急時は家族に連絡し看護師が付き添いを行い、病院で家族と合流して迅速な受診につなげている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	介護職は入居者の変化を速やかに看護職に報告して相談したり指示を受けたりしている。受診する時はケアマネや看護職が付き添って行く。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院が必要になったら速やかに対応できるように、かかりつけ医に普段から定期的に情報提供しながら関係をつくってる。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化してからは施設でかかりつけ医の指示をもらいながら家族・本人と支援の方針・内容を話し合っている。また契約時に家族・本人には重度化した場合は他の施設や病院に移ってもらうことがあると説明している。	昨年ターミナルケアの外部研修に参加した職員が、研修結果を定例会議等で報告し話し合いを行っている。以前、重病の入居者の家族の要望を受けて、かかりつけ医と緊急時の対応等のカンファレンスを行った例がある。今後も入居者・家族からの要望に応じて、できる限り事業所で継続して生活できるよう支援していく方向で考えている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	緊急時の対応については、すでに勉強会で学習している。2月には普通救命講習を行う予定である。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	日中・夜間それぞれの火災を想定した防災訓練を年に1回ずつ行っている。その時は消防署職員の立会いの下で近隣住民にも協力してもらっている。	年2回併設の事業所と共同で避難訓練を行っている。前回実施した夜間想定訓練では、初期消火・連絡・誘導・居室確認とスムーズに行動出来たが、時間がかかりすぎたと事業所は認識している。誘導の優先順位、地域住民や勤務外職員の協力をどうするか等の反省点を踏まえ、次の訓練を充実したいと考えている。2月には救命救急講習の受講を予定している。	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	入居者に愛情を持って、近くに寄り添って、適度な音量で話しかけるように心がけている。トイレや浴室ではきちんとドアを閉めて介助するようにしている。	話す回数が少ない方には世間話などから会話を始めるようにし、難聴の方には耳もとでの会話や仕草、絵などで要望を理解する様にしている。トイレのドアをきちんと閉めることを徹底し、入浴時の対応についてもプライバシー保護に気をつけている。入居者から他の方の個人的な事柄について質問を受けた場合は、十分注意して答えるようにして、気づいたことは定例会議などで話し合い職員間での対応の統一を図っている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	随時入居者に声をかけて、どんなテレビが見たいとか、どんなレクリエーションがしたいとか、確認している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	一人一人の入居者に対して、どのように過ごしたいのかを確認して、できるだけその希望に沿って支援している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	毎朝、顔の清拭・整髪・ひげそりなどを行っている。なるべく服は自分で選んでもらうようにしている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	嫌いな食べ物は出さないで別の物を提供している。行事の時は季節にちなんだ食事となる。職員も一緒に座って音楽を聴きながらゆっくりと食べられるようにしている。食後は職員と入居者が一緒に片付けや食器洗いをしている。	調理済みの食品を業者から購入して提供しているが、献立表を確認して入居者の嫌いな食べ物がある時は変更するようにしている。献立によっては副食が少ない時があり、もう一品職員が手作りすることもある。自分でできる方には食器の片付けや食器洗いをしてもらっている。水分摂取量をチェックし、水分補給にも気をつけている。	

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事量・水分量は摂取時に必ず確認して、不足することがないように注意しているが、体重の増減によっては食事量を調整することもある。水分は食事時の外に、運動後や入浴後や希望時にも提供している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、一人一人に口腔ケアを促して、一人一人の能力に応じて介助している。例えば、代わりに義歯を磨いたり、ガーゼで口の中を拭いたりしている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄チェック表で個々の排泄パターンを把握して適時に声をかけてトイレ誘導をしている。トイレでのズボンの上げ下げやおしり拭きはなるべく自分で行うように促している。	排泄チェック表でそれぞれの入居者の排泄パターンを確認し、定時誘導や声かけでトイレに誘っている。所要時間が長く体勢が不安定になりがちな場合でも職員は見守りで安全を確認し、ズボンを上げる時だけ介助するなど、出来ることは自分でやってもらうような支援をしている。トイレの入り口に黄色で立体的な表示をして、3か所あるトイレがひと目でわかる様にしている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	野菜・乳製品・水分を十分に摂取することと、適度に運動することを心がけている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	基本的には一人一人に入浴の意思を確認してから入浴を行っている。入浴は一人一人のペースに合わせて支援している。入浴後には皮膚に保湿剤や軟膏をぬって、ケアしている。	午後の時間帯に、毎日3名ほどの入居者が一人ずつ必要な介助を受けながら入浴しており、入居者によっては機械浴の設備のある併設の事業所で、2人介助で入浴している。職員は声かけ誘導の際にも気を配り、入浴を拒んだ場合は時間をずらしたり日にちを変えたりして、ゆっくり気持ち良く入浴できる様に心がけている。季節を感じるゆず湯なども取り入れている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	一人一人にその日の体調によって、休みたい時にはソファやベッドで休んでもらっている。その時は室温を調整したり時には湯たんぽを使ったり介護度が重い入居者の場合は体位変換したりしている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	職員は申し送りを受けた上、各自が薬の説明書を確認したりして、その目的・副作用などを理解している。服薬は必ず確認して、症状に変化があったらすぐ報告するようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	自分の能力に合わせて家事を職員と一緒に 行っている入居者がいる。経験を活かして、職 員と秋に干し柿を作ったり年末に正月飾りを 作ったりしている入居者がいる。なじみの理容師 を施設に呼んで散髪してもらっている入居者が いる。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出か けられるよう支援に努めている。又、普段は行け ないような場所でも、本人の希望を把握し、家族 や地域の人々と協力しながら出かけられるように 支援している	春には桜を、秋には紅葉を観に行ったり、 正月は初詣に行ったりと、季節を感じられる ような外出を行っている。	桜・あじさい・紅葉の見頃に合わせ、季節ごとに全 員で外出して外食等も行っている。地域のどんど 焼きに参加して、子供たちとの触れ合いもしてい る。職員の食材調達時に、2、3人程の入居者が 同行し、近所のスーパーで生活用品やおやつな どの買い物をしている。	買い物外出は、現在は限られた2、3人だ けであるが、今後季節が良い時期に、他 の入居者も順番に外出が出来るよう取り 組むことが期待される。
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解し ており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を 所持したり使えるように支援している	普段小遣いは事務所に預けているが、職 員に買い物を頼んだり外出時に自分で買い 物をしたりすることができる。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙 のやり取りができるように支援をしている	入居者から要望があれば、いつでも家族と 電話で話すことができる。また手紙の投函 を代行している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴 室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をま ねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がな いように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、 居心地よく過ごせるような工夫をしている	リビングはサッシや高窓から十分な日差し が入り、職員と入居者が協力して作ったカ レンダーや書道作品が飾られている。食堂 からは季節を感じることができる中庭を望 むことができる。また廊下の壁には最近の 行事の写真が紹介されている。	リビングの天井は高く、高窓からの光で室内は明 るい。壁には入居者の習字や塗り絵の作品が貼ら れている。入居者と職員と一緒に作ったカレン ダーは、材料を工夫して新年にふさわしい華やか な雰囲気の作品になっている。キッチン是对面式 で職員が入居者を見守りやすくなっており、洗面 や口腔ケアに利用する洗面台は明るくきれいであ る。午前はボール投げやゲームなどを楽しみ、午 後はソファでテレビを見たりして、入居者は陽射し の入る暖かい空間でゆったりした時間を過ごして いる。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利 用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の 工夫をしている	食事席は、気の合う入居者同士で座れるよ うに決められている。またリビングの座席は 自由席となっている。		

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	家族には居室に入居者になじみのある道具や小物を持ち込むように勧めている。壁に写真や手作りカレンダーを貼ったり床に観葉植物を置いたりしている入居者もいる。	各居室入口に花の名前のプレートがついており、職員と一緒にトイレトペーパーの芯で作った可愛い動物が入口に取り付けられていて、部屋の区別ができるようになっている。ベッドやダンスなどは使いやすい位置に置き、壁にはカレンダーや習字・塗り絵など自分の作品を飾り、居室によってはぬいぐるみや加湿器などもあって、入居者が自分らしく過ごしている様子が窺える。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	居室やトイレの入り口に看板や目印を付けて入居者が分かりやすくしている。台所のカウンターなど入居者がぶつかりやすい所にクッションテープを貼ってけがをしないようにしている。		